

遠州灘海岸の砂丘(地学散歩(57))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 仁美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025172

遠州灘海岸の砂丘

松本仁美*

地学散歩(57)

遠州灘海岸には、御前崎から伊良湖岬まで東西延長 120 km にわたって、緩やかな曲線を描く砂浜が続いている。遠州灘海岸の内、浜名湖より御前崎までの東半分は砂丘が発達し、中田島砂丘や浜岡砂丘など、いくつかの砂丘が観光地として知られている (写真 1)。

天竜川の吐き出す膨大な砂礫をもとにして、東向きの強い沿岸流や風波が砂州を発達させ、さらに、この地方独特の卓越する西風がその上に砂丘を作っていった。冬、季節風の強い日に海岸に立つと、足下の砂が西風によって飛ばされ、目を開けていられないほどである。

西風が作り出す風紋 (写真 2) はこの地方の風物詩となっているが、風紋は 5~6 m 程度の風速の時に作られ、風速がそれ以上になるとかき消されてしまう。強い西風は砂丘の上をころがる礫を削り、風蝕礫 (三稜石、写真 3) をつくる。御前崎町白羽地区は国の天然記念物に指定されている。

天竜川以東の砂丘砂を分析して見ると、天竜川から離れるに従って粒度が小さくなる。距離と粒度とは直線的な相関があり (図 1)、これは、この地方の砂丘が、天竜川が吐き出した砂によって生成されたものであることを示している。

自然の営力によって作られる砂丘は、風向きに対して直角に伸びる横列砂丘 (櫛の歯砂丘) であるが、この地方の砂丘は風向きに対して 45 度の方向に伸びている。これは、砂丘に人間の力が加わり、作り替えられたためである。木の枝や竹を使って柵 (粗朶: そだ) を作り、風向きに対して 45 度の方向に並べると、飛砂はこれによって向きを変え、速度の落ちた砂は柵に沿って堆積する。さらにこの上に柵を立てると、砂丘は次第に形成される。飛砂の被害に悩まされていた農民の考え出した生活の知恵とされる。砂丘に黒松が植えられ、砂が固定されると、やがて砂丘の背面には低地が形成される。ここは水田や畑に開墾され、利用されるようになった。現在では、海岸線に長く伸びるコンクリートの堤防とその上を走る自転車道路が砂丘の成長をうち消しているように思える (写真 4、5、6、7)。

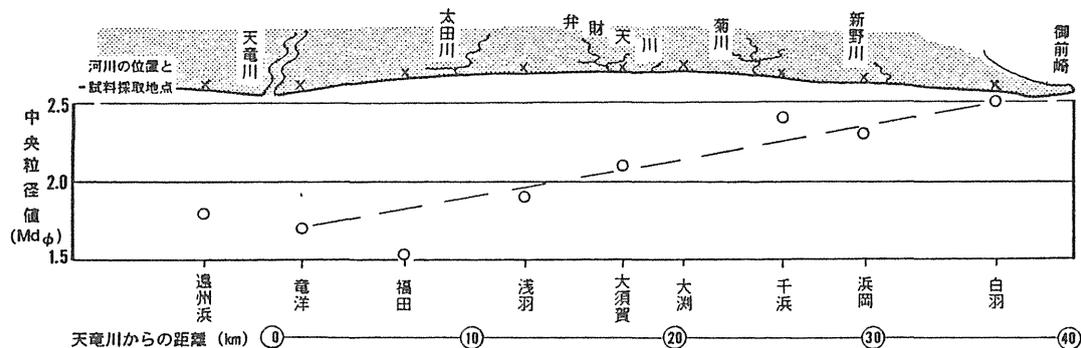


図 1 遠州灘海岸東部の砂粒の分布

粒度分析による中央粒径値 (Mdφ) は天竜川から東へ離れるに従い、直線的に増大している。河口から出た砂が東へ運ばれて粒が小さくなっていく。

* 静岡市立一番町小学校



写真1 浜岡砂丘



写真2 風紋 平均風速が5～6mの時にできる

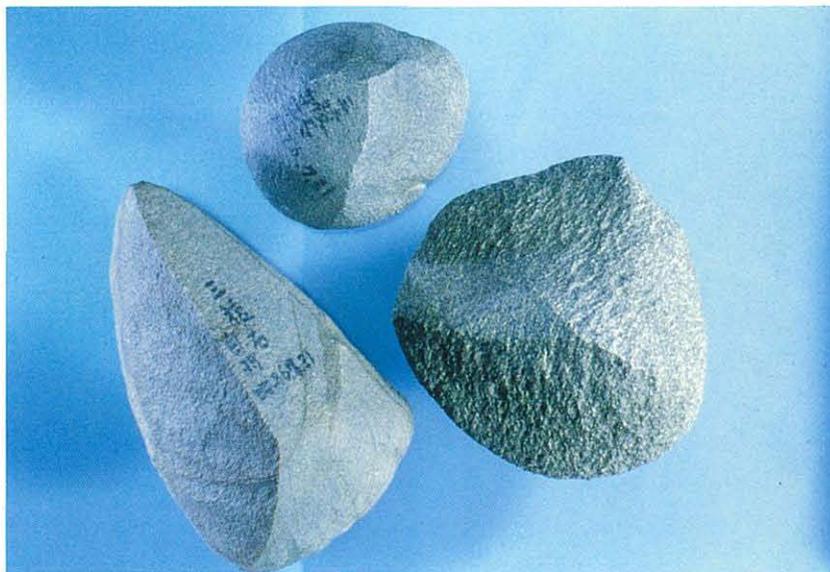


写真3 白羽の三稜石（静岡精華高校蔵）



写真4 浜岡海岸。砂丘上の粗朶と奥の松林



写真5 大須賀町大淵地区。砂丘背後の低地



写真6 大須賀町沖之須海岸。自転車道



写真7 御前崎町白羽。海岸線に続く堤防